

■ 芭蕉と鳴海の古刹散策

はじめに

鳴海には松尾芭蕉(1644～94)の遺跡が数多くあるがあまり知られていない。

先ず千句塚公園では、芭蕉生前唯一でしかも直筆が刻まれた碑の千鳥塚が、建立された当時のままの姿で見ることが出来る。次には誓願寺境内にある芭蕉堂と供養塔である。何れも名古屋市の史跡に指定されている。

◎芭蕉と鳴海　（ばしょうとなるみ）

江戸時代の貞享から元禄にかけて鳴海六俳仙と呼ばれる下里知足(造り酒屋で下里家二代目当主吉親)、寺島美言(鳴海本陣当主伊右衛門、知足母の弟)、寺島安信(嘉右衛門、美言の分家)、岡島自笑(佐助、刀鍛冶)、児玉重辰(源右衛門、花井の間屋場の主人)、如風和尚(文英、如意寺六世住職)らは芭蕉を後援して師弟の関係にあった。芭蕉と鳴海の間わりは貞享二年(1685)四月「野ざらし紀行」の旅の途中、熱田の俳人林桐葉の紹介で鳴海本陣を訪れたことによりはじまり、美言は本陣職の当主であり知足の叔父でもあった。鳴海の俳壇の中心人物であった知足は、大阪の西鶴や江戸の其角など芭蕉以外にも東西の有名な俳人や文人との交わりが多い名士で知足宅が芭蕉の鳴海での宿になった。芭蕉は生涯四度鳴海を訪れ、下里家に貞享二年四月木曾路より江戸へ下る時二泊、貞享四年(1687)十一月江戸の帰途立寄り十泊、翌五年(1688)七月西国からの途中七泊、そして最後は元禄七年(1694)五月で立寄り一泊であった。また鳴海にも来訪したかと思われる貞享元年(1684)桑名熱田に来た際と、元禄四年(1691)に江戸に下る途次に新城の太田白雪を訪ねている際に東海道を下っているが鳴海に立ち寄ったかは定かではない。

◎千代倉家　（ちよくらけ）

鳴海の豪族下郷(下里)家一族は宿村役人を勤めた家で、本家筋に当たる下郷次郎八家(千代倉)は江戸時代は造り酒屋で江戸へ船で出荷して財をなす。二代目当主吉親(俳名知足)は文人で芭蕉の門弟の鳴海六俳仙の一人でリーダーであった。芭蕉は熱田の俳人林桐葉を介して知足と懇意になり、熱田に来たときは必ず鳴海の知足宅に足を延ばし逗留して俳席をもった。知足の子秀雄(俳名蝶羽千代倉三代目)、元雄(俳名亀世千代倉四代目)、孫の昌雄(俳名常和千代倉五代目)、寛(俳名学海千代倉六代目)ら多くの俳人を生んだ。

◎鳴海の翁塚　（なるみのおきなつか）

鳴海には四ヶ所に六つの翁塚がある。

千鳥塚　（緑区鳴海町三王山千句塚公園内）

日本最古の翁塚で芭蕉存命中唯一のものである。千句塚公園として整備された一角に、大きな榎の樹下に高さ五十糎程の石碑が建立されている。貞享四年(1687)十一月七日に地元鳴海の六俳仙の一人であった寺島安信宅で歌仙「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」の巻が終りになったのを記念して建立されたもので、文字は芭蕉直筆で表には「千鳥塚」下に二行で「武城江東散人」「芭蕉桃青」と刻み、裏面には「千句塚」と六俳仙の名、「知足軒寂照」「寺島美言」「同　安信」「出羽守自笑」「児玉重辰」「沙門如風」と側面に興行の年月「貞享丁卯年十一月日」が彫られている。

誓願寺の供養塔　芭蕉最古の供養塔
成海神社境内游心席亭の句碑　昭和四十二年七月建立　緑文化協会
『初秋や海も青田の一みどり』
芭蕉3度目の江戸より来訪児玉重辰宅で　　貞享五年七月十日

天神社境内の句碑　平成三年春　鳴海商店街協同組合　宇佐見魚目謹書
『杜若われに発句の思いあり』
芭蕉熱田から知足亭最初の来訪の一句　　貞享二年四月四日
『京まではまだ半空や雪の雲』
芭蕉二度目の江戸より来訪寺島美言亭で　　貞享四年十一月五日
『よき家や雀よろこぶ背戸の粟』
三度目の江戸より来訪知足弟知之の新宅祝いに　貞享五年七月十日

◎**来迎山　誓願寺**　（せいがんじ）西山浄土宗
（緑区鳴海町根古屋16番地）　T E L 052－621－3522

天正元年(1573)に創建、千代倉家の菩提寺で僧俊空の開山。本堂は間口七間奥行七間半寄棟造棧瓦葺。前面に向拝が付く、内陣廻り円柱その他の面取りの角柱で、外部には斗組を用いず客殿式の建物。本尊は木像阿弥陀如来像。千代倉家から移築された山門は一間高麗門で裏棧付板戸を肘壺でつり、四代元雄の時代に自宅の門を移したもの。この山門をくぐると境内に芭蕉ゆかりの供養塔や御堂があり、下郷家の墓地と鳴海俳諸塚(鳴海俳人の句碑や墓碑)や第十代の代官の碓氷清八郎重治を顕彰した碑(碓氷君徳政碑)がある。また庚申坂に古い観音堂がある。

鳴海俳諸塚
境内と本堂横の墓地に鳴海俳人の句碑や墓碑がある。
境内芭蕉堂前東向き北側　蝶羅(ちょうら)『極楽といふねぶるや蚊帳の内』
南側　山父(さんぶ)　『南無といふ声さへ細し秋の暮』
蝶羽(ちょうう)『ふんきってあし跡かくす雪の松』　風和翁
亀世(きせ)　『念仏も誠になりぬ後の月』　鉄瘦墓
常和(じょうわ)『如月やあたらしき笠きて帰る』　常和

芭蕉堂と芭蕉最古の供養塔

芭蕉堂は誓願寺境内にあり間口一間半の木像瓦葺きの土壁のお堂である。安政五年(1858)冬に俳諧竹内竹有の門人で荷風の曾祖父に当たる永井士前(1807～88)らが建立。台座の下に建立者の士前ら十八人の名が書かれている。本尊は高さ三十八糎の芭蕉座像で細根山の寂照庵に安置されていたもので、堂の入口には「芭蕉堂」(瑞泉寺二十世吞舟和尚(～1762)書)の扁額と中には「翁堂」(成田蒼虬筆)の扁額と「鴨」(立松義寅画)の額が置かれている。この像は細根山(千代倉の別荘小山園)の芭蕉お手植えの杉の木で宝暦三年(1753)又は五年の台風で倒れた古木を名古屋の仏師嘉右衛門が彫刻したものとなえられ、一方は寛政七年(1795)芭蕉縁の杉の木の余材を大高の篆刻家墨山(余延年)が貰い受け、二体を刻みその一体(立像)は井上士朗によって名古屋松原の東輪寺(寛政八年春開眼供養)に納められたが、そちらは戦災で消失したので、この像は価値ある貴重な縁ある翁像であると言われている。《拝観は要予約》
供養塔は芭蕉堂の東南脇の木立の中にあり、碧色の自然石に「芭蕉翁」裏面に元禄七年(1694)甲戌十月十二日の没年月日が刻まれていて、下里知足ら鳴海連衆によって亡くなった翌月の忌日に、如風和尚の如意寺で追悼会が催され建碑(芭蕉最古の供養塔)されたものである。後年知足ら縁のある千代倉の菩提寺の誓願寺に移された。

◎**芭蕉と細根山**　（ばしょうとほそねやま）(小山園)（緑区鳴海町細根山）
有松の鳴海団地の北方に「細根山」(小山園)はある。下里(下郷)家当主二代知足(1640～1705)の代天和三年(1683)の記録があるからこの時代には既にあり、三代蝶羽(1677～1741)四代亀世(1688～1764)と八十有余年の三代親子で完成された別荘小山園は、四季折々の景観を醸しだし多くの俳人が訪れ、尾張名所図絵にも描かれ、「山中に十四景ありて四時の眺めの乏し驅らず頗る幽致あり」と記された名園であり、特に六代当主学海(1742～90)は、幼き頃よりこの地で育ち、学問に秀でていたため思い入れも深くこの頃が一番隆盛ではなかったかと思われる。また今次大戦前の昭和十年代までは多数の家屋が散在していて荒廃したとはいえ風致を残していたが、戦後の住宅団地開発などで特に伊勢湾台風のおりに「寂照庵」「湛然堂」など由緒ある家屋は倒壊して既になく、栄華を物語る下郷一族の墓地のみが残されている。また貞享五年(1688)夏に芭蕉が訪れた折りに詠んだ『よき家や雀よろこぶ背戸の粟』の短冊を祀った五輪塔の粟家は今は本宅の庭に移設され大切に保管されている。寂照庵前の竹藪の中に芭蕉の愛弟子榎本其角が訪れて詠んだ句碑「三吟塚」、嘉永二年(1849)に千代倉江戸店の番頭小田新兵衛が建てた塚「一七日寂照亭」　『背闇や霧のけしきに鳴海がた』　其角
『旅路かきなる雁の高声』　知足
『関風の色吹越える山見へて』　美言

や石塔が残されている。その他細根山の玄関口に知足が祀った天神社は時代とともに変遷し、今は天満宮として地元の人々によって祀られている。そして周りが開発されて住宅やマンションが建ち並び裾野の空間を埋め尽くされつつあるけれど、まだまだ細根山のお山は自然の静けさを保ち続けている。また鳴海の知足亭より細根山へ芭蕉らが歩いた細根道は住宅が建ち並び昔を偲ぶ風情はないが今も曲がりくねった山道は殆どが辿る事が出来、細根山にある天満宮に至る。

鳴海12ヶ 寺古刹めぐり

名古屋の都市の発展は慶長(1600～)以来であるが、鳴海は日本武尊伝説に因む成海神社を筆頭に産土神信仰により古くから社が連綿と祀られていた。一方寺院は鎌倉海道沿いに集落が発展して、人々の生活が営まれ、民族信仰や文化的伝統が生まれはぐくまれた室町時代に始まる。最初に小さな庵から布教が始まり、戦火に揉まれながらやがては武士に庇護され、人口が増えるに伴って東海道筋が整備される十六世紀中頃から鎌倉海道沿いより現在地に移転して位置が確定した。江戸時代は幕府の寺院保護政策と宗門改めと相俟って寺院の経済、文化、社会的地位を確立。それ故に本堂や庫裏等の建造物、仏像、内陣、欄間等彫刻に見る文化的価値を認める事が出来る。

①**紫雲山　金剛寺**　（こんごうじ）(行者堂)曹洞宗
（緑区鳴海町平野41番地）　T E L 052－621－0401

宝暦十年(1760)の創建、瑞泉寺二十世吞舟の開山、本尊は木像行者菩薩像で行者堂ともいう。昭和十七年(1942)　本尊行者菩薩の金剛杖から曹洞宗紫雲山金剛寺に改められた。境内には西国三十三観音の祠があり、堂内の十六羅漢像は明治時代の鳴海焼の逸品である。

②**龍蟠山　瑞泉寺**　（ずいせんじ）曹洞宗
（緑区鳴海町相原町4番地）　T E L 052－621－0041

寺伝によれば永徳元年(1381)大徹宗令が東遊の際、鳴海の平部山に庵を結び人々に説教したのが始まりで室町幕府三代將軍足利義満が旅の途中宗令に帰依し唐画荘田二十町歩等を与え、時の鳴海城主安原宗範は応永三年(1396)伽藍を建立、その後兵火により焼失し、文亀元年(1501)頃現在地に移転再建。正徳年間(1711～16)に瑞松寺より瑞泉寺に改め、中興の祖吞舟が豪族下郷弥兵衛の援助により堂宇を宝暦六年(1756)完成。現存するのは法堂山門及び鐘楼で庫裏は文化年中(1804～18)、僧堂は幕末慶應三年(1867)の再建である。規模、構造の雄大さは市内屈指のもので、裏の墓地から西方の展望で浄泉寺、萬福寺、園龍寺、円龍寺、誓願寺、鳴海城跡など素晴らしい昔の景観がしのばれる。山門(県指定文化財)は三間一戸重層四脚門、宇治の万福寺の惣門を模したものである。またこの地は笠寺観音の再興の願主藤原基経の子兼平夫人玉照姫の住んでいた鳴海長者成高の宅址とも言われる。法堂の裏には龍王堂があり蛇に纏わる伝説(龍王伝説)がある。

③**木林山　浄泉寺**　（じょうせんじ）真宗高田派
（緑区鳴海町上中町9番地）　T E L 052－621－0521

永享四年(1432)鳴海荘の森山左近三郎吉勝は蓮空上人に帰依して落飾し、浄空と名乗り室町幕府將軍足利義教の庇護のもと創建、文明十年(1478)　兵火に逢い灰燼に帰し砦から現在地へ移転した。同十五年に寺号浄泉寺を授与された。本堂は棟札によれば享和元年(1801)の建立。間口七間奥行七間の寄棟造本瓦葺、内陣の天井は周囲は格天井、中央部は清洲城下の廊下を移した菱形天井で珍しいものである。本尊は阿弥陀如来像。近年境内が整備され納骨堂、釈迦三尊石像などが建立された。

④**三井山　萬福寺**　（まんぷくじ）真宗高田派
（緑区鳴海町本町5番地）　T E L 052－621－0213

永享年中(1429～41)三井右近大夫高行の創建で永禄三年(1560)兵火で焼失再建した。本堂は中興の連純和尚が文政十年(1827)から改築を始め二十五年かけ、間口八間半奥行八間半三間の向拝付き、前に縁を設け入母屋造本瓦葺の大型の本堂を完成した。幕末尾張藩主徳川慶勝が直筆の扁額鳴海寺を残し、本堂の欄間には名古屋の彫物師瀬川治助(鳴海の山車彫に係わる)による龍と天女の彫物が見事であり、明治六年(1873)鳴海小学校の前身である広道学校として発祥した所である。

⑤**竹林山　圓龍寺**　（えんりゅうじ）真宗大谷派
（緑区鳴海町本町11番地の1）　T E L 052－621－3005

初めは天台宗で善正寺と称し善照寺砦近くにあったが嘉禎年中(1235～38)僧善念が真宗に改め、桶狭間戦に際して焼失させられ、二転三転して現在地に移った。旧本堂は昭和六十年(1985)に建替えられたが、宝暦七年(1757)の建てで間口七間半奥行七間入母屋造本瓦葺で、前面に一間の向拝がついて荘厳な寺院だった。本尊は阿弥陀如来像。寺宝に伝恵心僧都作の秘仏薬師如来像があり、目の薬師で珍し龍の蓮華台座に立ち、この龍座により円龍寺。由緒書など古文書もありこの地は鳴海廃寺跡地(軒丸瓦の出土)でもある。

⑥**庚申山　円道寺**　（えんどうじ）(庚申堂)曹洞宗
（緑区鳴海町根古屋18番地）　T E L 052－621－0089

文禄年間(1592～95)の創建で瑞泉寺十一世仁甫和尚の開山。庚申山猿堂寺と称していたが宝暦七年(1757)に有松村に移転し現在の祇園寺となった。一方旧地には地藏堂があって安永三年(1774)に庚申堂と改称し後に円道寺となり現在に至っている。本尊は青面金剛童子(庚申)。屋根に「見ざる」「言わざる」「聞かざる」の三猿が据えられている。寺前の坂を庚申坂という名称はこの堂名に由来する。庚申信仰は室町時代以降に広く民間に流行し、干支の日の内で「庚申(かのえのさる)」の日(年に六回)を特別視して信仰行事を行う。

⑦**来迎山　誓願寺**　（せいがんじ）西山浄土宗
《芭蕉コースで解説》

⑧**頭護山　如意寺**　（にょいじ）(蛤地藏) 曹洞宗
（緑区鳴海町作町85番地）　T E L 052－623－9168

康平二年(1059)に開山。創建時には青鬼山地蔵寺といい上の山方面にあったが、弘安五年(1282)長母寺の無住国師が現在地に移転再興。応永二十年(1413)現在の山号寺号となった。本尊は伝定朝作の一丈六尺地藏菩薩で、昔正月に歩射の行事で蛤を放生したので蛤地藏の名があり、何か大事件があると地藏さんの首が傾き汗をかくと言われ、また江戸時代時の鐘を鳴らし別名鳴海寺とも言われている。本堂、地藏堂のほか門前に弘法堂と中に咳地藏と十王像がある。この辺りが鳴海宿西の果てで多くの旅籠が密集していて輪違屋は昭和四十年代まで営業していた。

⑨**護国山　東福院**　（とうふくいん）真言宗智山派
（緑区鳴海町花井町3番地）　T E L 052－621－0712

本尊は大日如来像で脇に不動尊が祀られており毎月護摩焚ぎの祈禱がある。元は赤塚にあったが兵火により焼失、その後森下を経て寛永年間(1614～44)中興の祖盛弁法印が廃城になった鳴海城の廃材で現在地に再建し、今の山門が遺物とのことである。鳴海城の廃城は天正の頃(1573～92)でかなり後年まで廃屋になっていたのであろうか。

⑩**白龍山　長翁寺**　（ちょうおうじ）(織田薬師)曹洞宗
（緑区鳴海町花井町甲50番地）　T E L 052－891－2931

古くは薬師山にあり天正年間(1573－92)に現在地に移転、瑞泉寺十世海雄圭禪大和尚の開山。本尊は釈迦牟尼仏(木像伝行基作)脇侍は右は文殊菩薩、左は普賢菩薩である。薬師堂の薬師如来像は織田信長の守護仏と言い伝えられ、俗に「織田薬師」と呼ばれ一族の織田長益有楽斎が堂宇を建て祀ったもので、寺の移転とともに移設されたものである。他に室町時代の石地藏や幕末の汁物帳がある。東海四十九薬師第三十四番。

⑪**一国山　光明寺**　（こうみょうじ）曹洞宗
（緑区鳴海町丹下26番地）　T E L 052－891－0004

当初鎌倉海道筋の三王山の東にあった真言宗清水寺を弘治二年(1556)現在地に移転、瑞泉寺九世剛菴洞金大和尚が開山となり伽藍を再興し曹洞宗光明寺に。本尊は子安地藏大菩薩、弘法大師の御作と言い伝えがある。付近には丹下砦跡、清水寺遺跡、鳴海陣屋跡などの史跡がある。

⑫**薬師山　桂林寺**　（けいりんじ）曹洞宗
（緑区鳴海町古鳴海47番地）　T E L 052－891－0484

明暦二年(1656)真言宗の薬師堂として開山された。安永五年(1776)八事の仏地院住職の物道和尚が隠居して薬師堂に入り曹洞宗に改宗し、明治になってから尼僧が守ってきたが今は住職が居られる。戦災で全焼したが立派に再建され平清盛より下賜された阿弥陀如来像が安置されている。古鳴海の鎌倉海道沿いにあった。
文政八年(1825)の道祖神の道しるべが祀ってある。東海四十九薬師第三十三番

参考資料
緑区誌、名古屋区誌シリーズ緑区の歴史、緑区の史蹟、名古屋市の史跡と文化財、名古屋市史、中日新聞、朝日新聞、緑区ホームサービス、愛知県の歴史散歩、愛知百科事典、角川日本姓氏歴史人物大辞典、芭蕉全集、尾張名所図絵、細根山小山園考等